

19号台風狂騒曲

根来 滯子

猛烈な風、記録的な大雨、数十年に一度しかないような超大型台風19号が関東地方を直撃のおそれ、とテレビが騒ぎ出したのは台風上陸の4、5日前のころからであった。つい一か月ほど前、15号台風が千葉県に甚大な被害をもたらしたばかりである。またか、という思いで漠然と情報を聞いていた。それが、気象庁の職員が深刻な表現に変わってきて、これはただ事ではないと思うようになった。「最大級の警戒を」「命を守るための行動」をとれという。具体的には安全なところに避難しろということなのだろう。事態はいよいよ深刻だ。映像で見た千葉県の被害の悲惨が目には浮かぶ。

瓦が飛び落ち、ブルーシートで覆われた屋根、天井がすっぽりと抜けている家もあった。窓ガラスが粉粉に割れ、水浸しになった床、さらに断水、停電と続く被災、電柱が2000本も倒壊したという。それらをテレビや新聞の報道で目の当たりに見たばかりであったので台風の脅威は十分に理解できていた。15号の

時、私の住む神奈川県西部はわずかに直撃を免れたが、千葉と同じような直撃の場面に遭遇したらその恐怖はいかばかりかと想像する。今年はまだ10月も半ばに近づいているから、台風シーズンは終わりだろうと安堵していた矢先のことであった。

それが、急速に発達した19号の到来である。10月の半ばは例年なら気候は上々、全国各地で様々なイベントが予定されている季節だ。主催者も翻弄されたようだが、猛烈な台風の前にはいかんともしたがたくほとんどがやむなくキャンセルをせざるをえなくなった。

私にしても13日に予定していた山中湖の「三島由紀夫文学館」の高橋睦郎の講演が延期になり大変に残念なことであった。

たびたび書いたことだが私は築五十数年の古家に二十数年一人で暮らしている。寂しいと思うことはあったが、一人暮らしが怖いという思いはほとんど感じることがなく過ごしてきた。就寝



時、玄関の鍵をかけ忘れてはつとしたり、天井をなにか（たぶんねずみ）が駆け回る音に驚いたり、窓の下をごそごそと何かが歩き回る音（多分猫）がしても、心騒ぐことはなかった。

しかし、近来、恐怖を感じる事が多くなつたのは年々激化してくる台風である。幸い、私の住む土地は、氾濫するような川が近くにあるわけでもなく、土砂崩れを起こすような山もない。丹沢にかこまれた穏やかな盆地である。ただ、強風が吹いて雨戸ががたがたとゆれたり、風のうなり声を聞いただけで、年期のはいつたわが家が崩壊するのではないかと恐れるのだ。今回予想される台風19号は風速60メートル、木造家屋なら崩壊してもおかしくないという報道だ。どのチャネルを回しても競って深刻な事態の到来を予報している。不安を片隅に追いやって過ごしていたが、台風が上陸するという12日（土曜日）夕刻の予報では、大きな暴風圏がすつぽりと関東地方を直撃するという。今回は静岡方面から上陸するらしい。神奈川西部はまさに千葉県と同じような被害を受けて当然だろう。気象庁は最大限の警戒を呼び掛ける。命を守れという専門家のアドバイスは重い。

いよいよ上陸が確定的となった前日の11日金曜日

の夜、東京在住の娘から電話があり、老母を一人、古家で過ごさせるのは心配だからホテルに避難したらどうかと言ってきた。ホテルならまずは安心だろう。烈風によって家が倒壊するのを目のあたりにするのはやりきれない。私も大いに乗り気になった。早速市内に2軒あるホテルを当たったが、いずれも満室だという。木造旅館では意味がない。慌てて近郊の市の、駅に近いホテル数軒に電話をしたが、なんと満室なのだ。どうして？私のように避難する人たちが多いのだろうか。やっと娘がネットで予約してくれたのは私の住むH市から電車で20分ほどの距離にあるA市のビジネスホテルであった。なにはともあれ予約ができて安心した。

しかし唯一の交通機関である私鉄は11日、早々と正午には運休するという。それまでにA市まで電車に乗って移動しなければならぬ。当日はすでに朝から豪雨であった。せかせかと荷物をまとめて避難民よろしく、自宅から駅までハイヤーを依頼した。運転手さんに「こんな悪天候にお願いして悪いわね」ということだった。プロ魂である。ホテルのあるA市まで、がらがらに空いている電車に乗った。ホームも電車も人影はまばらであった。



10時30分にはA市の駅に着いてしまった。改札口周辺は閑散たるもので駅構内も照明を落とし、駅ビルも飲食店通りも店はみな休業、シャッターがおりている。チェックインの時間までレストランで昼食をして、喫茶

店で時間をつぶしてなどと考えていた浅はかさ

を痛感した。台風で電車が止まるくらいなのだから店も休業して当然だということに気付かなかつた至らなさをかみしめた。ホテルには夜の食事が無い。チェックインは4時である。朝食も取らずに家を飛び出してきて、明日の朝まで食事ができなかつたらどうしようかと不安が込み上げた。

駅から続く、人気のまばらな地下道をとぼとぼ歩き、休業日のほとんどないスーパ―「イオン」を目指す。この地下道は風雨を避けるのに絶好である。地獄に仏か、スーパ―「イオン」は煌々とした明かりが

いて営業していた。目指す地下の食品売り場は大勢の人でごった返していた。みな、弁当やパン、飲み物など、食料品を買いあさっている。私もその中に混じって、かつ弁当とサンドイッチを買うことができた。延々とレジに並んだが、そんなことに不平は言っていられない。食事を抜くということは私にとって死活問題なのだ。必死である。

さて、昼食のサンドイッチを買ったのはいいがどこで食べるかである。思い当たったのはすぐそばの雑居ビル「I」で、9階には映画館がある。そこには上映時間を持つ人たちの休憩場所、ラウンジがあり、ソファが並んでいる。雑居ビルに入っている店舗はみな休業で人影はなかったが、ビル自体は明るく、エレベーターも動いていた。映画は上映されていなかったが、とにかく9階にたどり着き、ソファに座ることはできた。全くやれやれであった。周りを見渡す。

年齢不詳の男性が3、4人、ソファの端のほうに座っている。目を閉じている人、新聞を読んでいる人、刻々と台風が近づきつつあるこの時刻、この男性たちはどういう素性の人たちであろうか。家族はいないのか、ホームレスの人たちではないようだ。彼らの立場をあれこれ想像するが、考えてみれば私のほうこそ不

審の目でみられているだろう。閑散とした映画館のロビーの片隅で、ぼそぼそと一人、サンドイッチを食べている高齢の女性。シヨルダーバックと手提げ、家出とは思えない簡単な装備。私こそが彼らから好奇の目で見られても仕方がないだろう。彼らは知らんぷりをしてくれたが、とき

キケンです！

外出は控えて下さい！！



ないのだ。まさに台風難民だ。

再びたどり着いた駅構内は女性の姿などほとんどなかった。電車に乗りそこなったような男性が数人、うろうろしている。もはや外は豪雨である。チェックインの時間など気にしている場合ではない。ホテルは駅

どき目線を感じる。

居心地が悪くなり、

それでもサンドイツ

チを平らげると早々に立ち上がり、エレベーターをおりた。

それにしてもチェック

インまでだいぶ間がある。またとほと

ぼと駅に引き返す。時間をつぶす場所が

から5、6分のところにあるのだがとても歩ける天候ではない。果然としてただただ駅の構内から吹き荒れる雨風を眺めるほかなかった。もう台風到来は目の前なのだ。いや圈内に入っているのだ。一人で家を飛び出してきたことが無謀だったのではと後悔と心細さで気持ちがあえてきた。

天の助けか、タクシーが目の前に止まった。慌てて駆け寄る。ほんの1分もかからない距離なのに、羽織っていたレインコートがべつたりと濡れるほどであった。それでも気持ちよくドアをあけてくれた運転手は、歩いて5、6分しかかからないホテルまでつれて行ってくれた。木造家屋に一人暮らしたからホテルに避難するのだと聞かれもしないことをいつたら、彼は「ホテルなら安心だし、大勢人がいるから心強いよ、気を付けてね」と労ってくれた。思わず感動した。

チェックインまでだいぶ時間はあったがロビーはすでに満席だった。何とか片隅に腰かけたたとたん、どつと疲れが出てきた。私は一人で何をしているのだろうか。

どんな顔をしているのだろうか。台風を避けて、快適な時間を過ごすはずなのに、難民のように人気のない駅周辺をさまよってきた。通行人はほとんど男性、たまに女性がいても若かったり、連れがいたり、ごく自然

体なのに、私は客観的にみて、まことに奇異な風体ではなかったか。それでも今、群衆の中になると、どんなに雨風が激しくてもこわいものなし、の気分で見知らぬ人たちと一緒に、大型テレビで刻々と近づいてくる台風情報にくぎ付けになっていた。今夜一夜を同じホテルに泊まるという共通の目的を持つ人たちに不思議な近親感をもった。ロビーから眺める外は街路樹が大きくゆれている、雨足の強いのが窓越しでも伝わってくるほどであったが、さすがはホテル、びくともしない。心強いことではある。

台風はやはり静岡に上陸したとの報道である。ロビーの大型テレビは現地を取材しているキャスターも、「最強の、最大級の台風」と、形容詞も半端ではない。命を守れと予報官の会見。それに従って私は自分の家を見限り、ホテルに避難したのだ。今頃家はどんなになっているだろう。雨戸はきっちり閉めたはずだ。植木鉢を中に入れ、手抜きはないと思う。きっと烈風に翻弄されきしきしと悲鳴を上げていることだろう。心が痛む。頑張って耐えてくれるように祈る心境である。

住所と名前と電話番号を書いてチェックインをすませ、やっと部屋に入ったときはもう5時に近かった。ホテル自体が新しいので部屋は清潔感があった。娘は

ツインルームを予約してくれている。慌てて予約してしまったのか、それともシングルは空いていなかったのか、二つ並んだベッドは広々として贅沢感があり艶めかしい。ついこの間までなら、隣のベッドに寝るパートナーとのあれこれを想像して楽しんだのだが、今は料金がもつたいたいと思うばかりである。

朝、9時半ごろに家を出て異常な風景の中を夕刻まで、食事もほどほどにさまよってきた。しかも8月に大きな手術をしたばかりのわが身である。どっと疲労がおしよせ、「かつ弁当」もほどほどに済ませ、終夜報道し続けているテレビをつけっぱなしにしてベッドに倒れこんだ。

さすが、ホテルの部屋に嵐の影響は感じられなかった。たまに「ごう」と風のうなり声が聞こえたような気がするが静かなものである。不安もなく眠れるというのはやはり然るべき場所にたどり着いたからだろう。いつの間にか、熟睡していた。珍しいことだ。常日頃不眠に悩む私だが、肉体の疲労は不眠も追い払ってしまったらしい。

部屋は北向きのようで夜が明けても薄暗く、まだ台風は近いところにうろうろしているのだろうかと廊下に出て驚いた。戸外から降り注ぐ日光のおびただしさ、

まぶしい光の氾濫。ロビーに降りてみたら大通りに面した窓から信じられないほどの深い青空が目飛び込んだ。台風は過ぎさつたのだ。まさに台風一過の青空を眺めたときの喜び、街路樹も倒れることなく天に枝を伸ばしていた。たった一日でこの天候の差はなんだろう。私はたつぷりとバイキングの朝食をとり、10時にホテルを後にした。

昨日は戸外に一歩も踏み出せないほどの風雨で、駅まで5分の道をタクシーにのつた。いま、A市の街には落ち葉が舞っているだけで台風の爪痕を残すようなものは何一つ見当たらなかった。千葉県では電柱や街路樹が倒れ、看板が飛び、無残な、惨憺たる風景があったが、A市の街は何事もなく静かな朝を迎えている。しかし、昨日に続いて私鉄はまだ動いていなかった。

すばらしい好天、光は満ち溢れ、道行く人も多く、日常は回復しつつある。昨日、不通になった電車は昼過ぎから開通ということで、線路を点検していて遅れているようだ。私は駅の近くの図書館で時間を過ごした。台風が過ぎたばかりなのに、館内は人々がたむろしていた。私はゆっくとソファに腰かけ、月刊誌に目を通した。

やがて電車は無事に開通して、それでも不通の区間

があり、代行バスにのり、無事に帰宅したのは3時に近かった。家は瓦一枚飛んでいなかった。軒下に立ってかけておいた自転車もそのままだった。

然し、台風19号の関東地方にもたらした被害は河川の氾濫、土砂崩れなど甚大なもので、百人近い犠牲者がでて被害の範囲は拡大していった。政府は「激甚災害」に指定した。

今年、私の住む神奈川に被害は少なかったが、来年無事とは限らない。いっどこで何が起きるかわからない地球規模の気候に翻弄されている。21世紀の現代、宇宙を遊泳する時代だというのに台風を発生と同時に消滅させることはできないのだろうか。一週間も前から台風の到来を予報しながら、手をこまぬいて、なすすべもなくただただ逃げることを奨励するのはいかにも能がない気がする。来年も私はホテルに避難することになるのだろうか。

(2019年 10月)